

## 鹿児島県国語教育史 (V)

上原覺市・上原森芳・西村義雄の話し  
ことば教育を中心にして――

### はじめに

「鹿児島県国語教育史 (IV)」では昭和二十・三十年代の共通語教育の考察を試みた。その中で、終戦後しばらくの間の「共通語」指導の状況・上原森芳の「標準語」指導の変遷・川尻部落総蹶起話しことば改善運動・「ことばのほん」の成立過程・共通語指導促進要因を取り上げた。

本論考では、「鹿児島県国語教育史 (IV)」で、残された課題としてあげた、上原覺市の昭和初年代における「共通語」指導の実態・上原森芳の「標準語」指導展開過程・西村義雄の話しことば指導観とその実践過程を明らかにし、それぞれのつながりについて論述したい。また同じく課題としてあげた、「川尻部落総蹶起ことば改善運動」の実態とその評価・「はなしことばの本」(昭和三十二年八幡小学校編)の作成過程の実証的研究は、ひとつの論として記すだけの資料・証言を得られなかった。これまでの作業から考えて、今後新たな資料・証言が出てくる可能性はほとんどない。しかしながら若干の資料は得られたので末尾に(資料I)として記したい。

なお「標準語指導」・「共通語指導」・「話しことば指導」の語は、引用文献からのものは「」つきで、それ以外では、順に概念の広がりのある

新名主：鹿児島県国語教育史 (V)

るゆるやかなものとして使用したい。具体的には「標準語指導」はアクセント・イントネーション矯正に主眼がおかれ、「共通語指導」は全国共通語・地域共通語の使い分け・語いの変換・「話しことば指導」は以上のものを含みながら文末表現、場面による使い分け指導等であるが、指導の内容と形態に柔軟性があるものとして考えている。

さて、上原覺市(明治二十九年～昭和九年・三十七歳)は川尻尋常高等小首席訓導(昭和四年～昭和九年)として郷土教育に全力を尽くし、後年、地区民の回想の中に「秋霜烈日の気風があり、学校・地域の教育に心血をそそぎ、常に陣頭に立って指導した」とある。没後五〇年を経た昭和五十九年、その功績により川尻漁港の入口に「上原覺市先生の碑」(写真)が建立され、その碑文の中に「共通語の普及」という業績があげてある。

上原森芳(明治三十三年～昭和五十四年・七十八歳)は上原覺市の弟で鹿児島県の「話しことば指導の父」とも称されている。その指導の特色はアクセント重視の徹底したものだ。松原尋常小訓導の時、小原国芳の講演を聞き、発奮、上京し成城学園小学部の訓導となる。この時秋田の近藤国一氏が同僚としていた。その近藤氏によって、今回、上原森芳の当時の指導の方法が明らかになった。彼は昭和九年帰郷し東京時代にも増して「標準語」指導にうちこむことになる。

新名主 健 一

(一九八八年十月十五日 受理)

西村義雄(大正七年)は昭和十六年、昭和十七年の間川尻尋常高等小・昭和二十一年、昭和二十二年の間徳光小で上原森芳の片腕として「標準語」教育に打ちこんだ。西村義雄(以下西村と略す)は川尻の生まれで上原森芳のおいにあたる。十七歳まで神戸で暮らし、その発音が「共通語」的であったために指導にあたらされたという。教職にある間一貫して話しことば指導に打ちこまれた方である。

本論考では次の三点と、それぞれのつながりと特色を明らかにしたい。

- ① 上原覺市の昭和初年代における「共通語」指導の実態
- ② 上原森芳の「標準語」指導の展開過程
- ③ 西村義雄の話しことば指導の展開過程と特色



上原覺市先生の碑(開聞町川尻)

「上原覺市先生の碑」の碑文の中に「共通語の普及」とあるが、上原覺市の教育観・教育実践の中でどのような位置づけができるであろうか。上原森芳(当時成城学園小學部訓導)は「郷土経営即學校經營」(『勞作教育研究』45)「四三P 玉川學園 昭和八年四月」という論文の中で、兄・覺市の學校經營の目的・方法について、次のように記している。

「比の郷土經營に當つての第一義は、先づ教育者自身が舊來の先生タイプの着物を脱いで純情を以つて郷土の民情の中に跳び込み浸ることであると思ふ。彼等と

朝夕生活を共にし、同化して、互いに喜憂を分ちながら郷土生活の歴史・地理・文化の程度・經濟・長所・短所等あらゆる事情を調査し、理解し、將來を計畫する所がなければならぬ。一郷土人として、その生活の向上發展に對しては、村の有志以上の着眼と熱誠とを持ち無我的努力を惜しまぬ慨ある時、着々其の効を奏して、やがて郷土の經營の主權を一手に握るに至るのである。ここに郷土總動員の大經營が一大家族の如く連營される。

其の中に生活する兒童は寧ろ教室より以上の教育を無意的有意的に受ける切れば血の進る少年青年が育つ。各科の研究は郷土を中心として擴く深く選擇され、兒童に勞作される。又老も若きも、男も女も各人残らず郷土意識を以つて全生活が統制され、郷土生活に於ける協同、相互依存の實を見ることが出来る。」とし、「十年計畫が兄の考えであり、前五十年間に郷土の文化の統整、後五年に於いて學校教科の改造へと進み、郷土教育に凡ての教育問題を包攝して一丸となし、經濟問題、思想問題、宗教教育、政治のあらゆる問題の統整された理想的郷土民を造る事が眞の國民教育であり、社會的人格の養生ともなるとしてゐたやうである。吾が小原國芳先生も參觀して下さつて激勵のお言葉を頂戴し兄の教育が部落總動員の大勞作に依る教育である點に共鳴され……(略、引用者)」(同書四九P)つまり、學校の教育は郷土(地域)の教育に包含されるとして、その郷土の教育の内容、方法について記しているのである。また同書(五十二P)において「川尻健兒團訓練細目」が掲げてあり、その中に次のような記載がある。

言語

奥さん  
はつきりした力のある發音要求  
ワイがという言葉の抑制

と云ふ言葉の勵行(現男女青年以下は皆止しくお父さんお母さん  
本年は比の言葉を……班クラブ會をとほして……と云ふ

教師でありながら、港の構築・登山道の整備・風俗の改善等の郷土教育の一環としての郷土の開発にも力を注ぎ、まさに一大スケールの発想の現に力を尽くしている。聞き取り調査の中で、川尻方言である「てじよ」を「おとうさん」に、「ねによ」を「おかあさん」に、「わいが」を「君」に変えさせたことも明らかにした。また、文末表現を「共通語」でしめくり、特に動詞に着目した指導や、方言語いを「共通語」に変えさせたり、「普通語デー」が設置されたりしていたという。これまでの記述からわかるように上原覺市の、「共通語の普及」（傍点・引用者）は民俗、文化の改善の一方策としての話しことば指導であり、郷土教育の一環としてのものであることがその特色としてあげられよう。

## 二

「鹿児島県国語教育史（Ⅳ）」で上原森芳の「標準語」指導の実践過程の大半については記した。ここではそれ以降明らかになった史実をもとに補遺的に論述していく。

上原森芳を「標準語」指導に駆り立てていった情熱の背景として、兄、覺市の教育者としての思想・人格に対する心酔・傾倒が指摘できる。上原森芳は「新年を迎えて」（「教育問題研究・全人」八十九P所収、昭和六年一月五十五号）の中に「東京遊學に對する父の熱心、あの峻しい山坂を六十の老體を忘れて走り上った其の姿、二人の兄の眞の犠牲的友情!!」と記している。上京する際に二人の兄（伊之助・覺市）に何らかの負担をかけ、それが兄達の友情の精神から出ているとされているのである。また、同誌（十四P）の「現代生活と教育」という論文の中で「自覺者は明日とか、此の次とか、又、とか言へない。時間に於いても一瞬が生命のきざみなのである。私の兄の三年前の一句を思ひ出した。『此の一會』（誠意を

持つて人に接する。）『此の一事神宿せ。』平生の一句々々が之辭世。」と兄の生き方に対する共感を記し、教育者の望ましい姿、教育のあり方について論じている。同論文（十五P―十六P）の中で「太愛に立ち上る時、衆人の馬鹿々々しいと蹴散らした後をほほ笑みながら敬虔な態度でそれを行なう。嘲笑冷評の中に、こつこつと涙と汗とほほ笑みとを以て肅々と精進する。凡人の意表外に出る。太愛は實に大愚である。小俐口さんから見たら馬鹿らしい損な事を何等の執着なく、平然として、而も命がけでやる。正に狂人の如く。無我大欲の太愛の肉弾は眞一文字に突進する。其の姿は、始め嘲罵に値するに似たれども、やがて、彼等をして壯嚴敬虔信愛の純情を喚起せずにはおかぬ。ここに教育の根本がある。」と記しているのは、おそらく兄・覺市の郷土教育の実践を念頭においているものと思われる。その兄・覺市は訓導でありながら郷土教育の一環として、港を築き、登山道を整備するなど、村の生活の「向上發展」に尽くしてきた。しかしながら、「十年計畫」の五年を過ぎた時点で、志半ばに病に倒れることになった。前五年が郷土の文化の統制・後五年が学校教科の改造がその計画であったが、後五年の学校教科の改造の中心は今のところ不明である。兄・覺市が川尻尋常高等小の訓導として郷土のために活躍しはじめた昭和四年―昭和五年にかけて上原森芳は鹿児島市の松原尋常小の訓導であった。後年（昭和二十九年）「川尻部落総蹶起話」ことば改善運動のピラの中で、川尻のことばを「女や子供が人間的なことばあつかいを受けているでしょうか。とくに親が子供に對することばづかいは全く聞くに耐えない戦国時代やそれ以前のことばが今日民主国日本、平和日本の川尻に平然として使われております。」（「共通語指導の実際」川尻小・昭和三十二年・十六P）としているぐらい荒いものとしている。昭和四年―昭和九年の覺市の話しことば改善の実践より二十年経ても、かなり荒いことばは駆逐されてはいなかったのである。逆に言うところ昭和四、五年当時の川尻のことばの

荒さは想像を絶するものであったに違いないことをうかがわせられる。当時、上原森芳は「修身」の先生として松原尋常小にあった。その「修身」とことばの関係がうかがわせるものとして、「鹿兒島県では封建的階級別のことばづかいが多く、殊に川尻には殺人的語法が多い。この方言丸出しの生活によっては人を敬愛する民主的社會人は育成されようがない。人を傷つけるような、殺すようなことばづかいを使うと、同時に手足が機敏に動いて直ちにけんかとなり、軽犯罪となる。道徳教育は正にまず『ことば』からである。」(上原森芳の指導体験録・「言語指導」二五六P所収、上甲幹一 昭和三十二年)というのがある。つまり上原森芳の「標準語」指導は、郷土化・生活化を図るための、兄・覺市の遺志を引きつぐ形のものであったことと、「修身」の目ざす人間育成のための情操陶冶であったと推定されるのである。

さて、上原森芳は松原尋常小を辞し昭和五年三月から成城学園小学部に勤務している。上原は「標準語」教育にとりかかった動機と時期について、和光学園でのアクセント事件、帰鹿してから始めた旨を記している。「日本の方言」百三十P 柴田武 一九五八)しかしながら成城および和光学園で上原の同僚であった近藤国一によると、「上原先生が私の感化を受けたというのは全くのデマで、私が上原先生に鍛えられた。授業が終わると教員室で上原先生が発音指導してくれました。指を口の中に入れて上歯と下歯の関係や口形を教えてくださいました。秋田の大先輩遠藤熊吉と同じやり方でした。和光の校長は秋田県人でしたが、発音はよかったです。アクセントは時々違いました。すると、上原先生が注意するのです。上原先生は和光では教師や子供の発音指導について、格別発言はしませんでした。何しろ学校騒動がようやくおさまったところでしたから。」(昭和六十三年五月十三日 筆者宛書簡<sup>注14</sup>)とあるように、上原森芳は和光学園時代から発音・アクセントについて一家言を持っていたと推察される。兄・覺市の「共

通語の普及」の実践を念頭におき、上京以来意図的な努力をもって標準語の発音とアクセントの習得を心がけていたのであろう。昭和九年五月、兄・覺市が死去した後、同年六月には和光学園を辞し、七月には鹿兒島県別府尋常高等小学校に勤務している。上原森芳には、もう一人兄がいた(伊之助・当時揖宿郡喜人高等公民學校助教諭)ので父母孝養のための帰郷の可能性は薄い。学校騒動により必ずしも東京が理想の地でないことの念が強くなっていたと考えられるので、おそらく心機一転、兄・覺市の遺業の継承を目ざしてのものであろう。しかしながら、東京での四年間に身につけた「標準語」は、帰鹿してからの上原森芳の教育実践の最も大きな柱になるのである。

これまで論述してきたことからわかるように上原伊之助(明治二十年生まれ)・上原覺市(明治三十年生まれ)・上原森芳(明治三十三年生まれ)の三兄弟は激しい気性を持ち強力なリーダーシップを発揮した教育者であったと言えよう。

### 三

西村義雄(以下、西村と略す)(大正七年) 千八九一—〇六 揖宿郡開聞町川尻五八五〇)は上原森芳のおい、(上原森芳は西村の実母、白沢イセの弟)にあたる。その履歴は次の通りである。昭和十二年鹿兒島師範二部卒・川尻小訓導(昭和十二年)昭和二十一年)・徳光小教諭(以下、略)(昭和二十一年)昭和二十二年)山川中(昭和二十二年)・徳光中(昭和二十三年)昭和二十四年)・利永中(昭和二十四年)昭和二十八年)・徳光中(昭和二十八年)昭和三十二年)・東郷小(昭和三十二年)昭和三十四年)・上甕中教頭(以下、略)(昭和三十四年)昭和三十七年)・山崎中

